

現代の若者の価値観とその分類に関する方法

Youth' s sense of value and happiness and the discrimination method.

南 学

要 旨

本研究では、現代の若者がもつ幸福観に関する筆者の一連の研究（南，2015；2018；2019a；2019b；2020）の総括を行い、3群が研究を通して安定的であることを示した。

また、クラスタ分析による分類を判別分析をもちいて判定する方法を試み、79.6%の判別的中率をえた。

Abstract

The present study summarized some articles (Minami, 2015; 2018; 2019a; 2019b; 2020) about a sense of happiness of today's youths by applying HEMA scale. Results show similar outcomes of 5 different surveys among different groups.

This article suggests that applying a discriminant analysis can lead to predict to classify groups by cluster analysis based on the existing surveys. The percentage of correct classification was 79.6% on that.

問 題

現状満足群の特徴

現代の若者にとって、少子高齢化や原発事故の影響、長期にわたる景気の停滞など、日本の状況は決して恵まれたものとはいえず、明るい未来も描きにくいと考えられる。にもかかわらず、彼らの生活満足度が高いことが社会学を中心に大きな関心となっている（古市, 2011; 2013, 豊泉, 2010）。この点に関し、古市（2011 ; 2013）は、若者と同じように高齢者の幸福度や生活満足度が高いことを指摘し、若者も同様に、将来に希望がもてないがゆえに、現状に満足しているという逆説的な幸福感の仮説を提唱している。しかし、自著のなかで若者が「一枚岩」ではないと述べておきながら、まるで若者がみなこうした考え方をしているという若者像の描き方には

違和感を感じる。また、幸福感に関してさまざま調査結果を事例研究的にかき集めており、実証的な検討が必要であると思われた。

そこで、南(2015)は、「幸せ」への動機づけをとらえるための尺度である日本版 HEMA 尺度（浅野・五十嵐・塚本, 2014）を用いて、若者の群分けを試みた。HEMA 尺度は、社会全体の“幸せ”を実現するための考え方としての快楽主義と幸福主義の両方を測ることを目的とした尺度である。快楽主義は自己の心地よさを求めた動機づけを指し、幸福主義は自分自身の存在を最大限に生かすこと目指した動機づけを指している。本研究で使用する日本版は、日常活動において覚醒度の低いポジティブ感情を求める傾向を測る「くつろぎ追求」、自分自身の存在を最大限に生かすことを目指している傾向を測る「幸福追求」、覚醒度の高いポジ

ティブ感情を求める傾向を測る「喜び追求」の3つの下位因子で構成されている。これらの3因子の得点によってクラスタ分析を行った結果、概してすべての得点が高い全追求群と比較的「幸福追求」が低い現状満足群、比較的「くつろぎ追求」が低い向上志向群が見いだされた(Figure 1)。このうち、現状満足群は、向上や成長、自身の力の発揮などをあまり求めない点が古市(2011)の指摘する「現在の若者の価値観」像に近いと考えられる。他方で、向上志向群は現在のくつろぎややすらぎよりも成長、楽しさ、面白さというような充実感を求めており、今のくつろぎよりも自身の成長や出世などを求める経済成長期の若者の価値観に近いものと考えられる。

これと同様の分析を、南(2018; 2019a; 2019b; 2020)でそれぞれおこなっているが、概して類似の結果が得られており(Figure 2-6; Table 1)、一定の再現性があることがわかる。全追求群は全体的に高い得点であり、現状満足群は比較的「幸福追求」が低く、向上志向群は「くつろぎ追求」が最も低くなっている。

この群分けにもとづいて、群の特徴を比較すると、現状満足群は時間的信念尺度(白井, 1993)において将来無関心因子の得点をもっとも高く、私生活主義尺度(久世・和田・鄭・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗像・内山・平石・大野, 1988)の「身近な事象への関心・社会的事象への無関心」因子得点をもっとも高かった(南, 2015)。また、現状満足群は、内面的関係と表面的関係をとらえる人間関係尺度(斎藤・藤井, 2009)における内面的人間関係得点をもっとも低く、人間関係希求型質問(内田・遠藤・柴内, 2012)において「自分をよくわかってくれる人との関係を大切にすることが、新しい関係を作ることよりも大切だ」という維持型の選択が多く、就職に関する地元志向を訪ねる質問(平尾・重松, 2006)においては有意な関連は見られなかったが地元志向を選択する割合をもっとも高かった(南, 2018)。これらの特徴は、古市(2011)の指摘する、現代の若者は内向きであるという特徴に概して一致する結果であり、やはり現状満足群が古市(2011)が示す現代の若者の

価値観にもっとも近いと考えられる。

しかし、この現状満足群は、主観的幸福感尺度(曾我部・本村, 2010)の主観的幸福感得点において全追求群よりも低く(南, 2015; 2018; 2019b)、周囲の人との関係性に関する幸福感を測定する協調的幸福感尺度(Hitokoto & Uchida, 2015)においても全追求群よりも低い傾向を示している(南, 2019b: 研究2)。これらの結果は、古市(2011)が主張する、「現代の若者」は幸福であるという見解とは異なる結果であり、古市(2011)が示す「現代の若者」とは異なる、すべての“幸せ”を追求する若者のほうが幸福感が高いという結果になる。

このように、若者の個人差に着目し、実証的な研究を行うと、事例的・傍観的な古市(2011)の主張とは異なる「現代の若者」像が見えてくることとなった。とくに幸福感に関する結果が大きく異なる点は、なぜこのような時代の若者が幸福なのかという点に関して中核的な問題であるので、今後も実証的な検討が待たれるところである。

向上志向群の特徴

他方で、向上志向群についても興味深い点がある。向上志向群は、気楽さややすらぎを求めるくつろぎ追求得点が低い一方で、自身の向上や自分を生かすことを求める幸福追求得点や楽しさや面白さを求める喜び追求得点が高い。これは、現在は厳しい状況でも努力し、結果として将来において成長することで、充実感や楽しさを得たいと考える群と考えられる。この群は Heckman (2013 古草訳 2015)が指摘する非認知的能力を持っていると期待できる。非認知的能力とは OECD (2015 池迫・宮本 2015)によると、「目標の達成」「他者との協働」「情動の制御」などの社会的情緒能力であると考えられており、このうち向上志向群は「目標の達成」にとくに強く関わっている群であると考えられる。南(2020)では、向上志向群がやり抜く力とみなせる Grit(Duckworth, 2016 神崎 2016)を測定する日本版尺度である Grit-S において、とくに根気因子において有意に高く

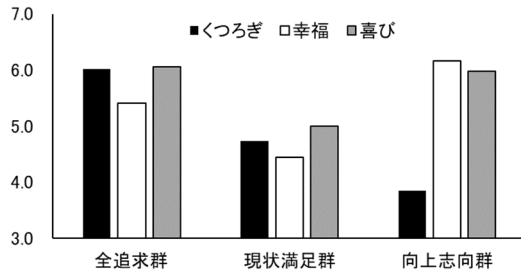


Figure 1 クラスタごとのHEMA尺度得点(南,2015)

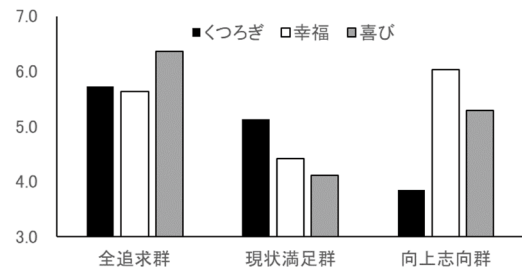


Figure 5 クラスタごとのHEMA尺度得点(南,2020)

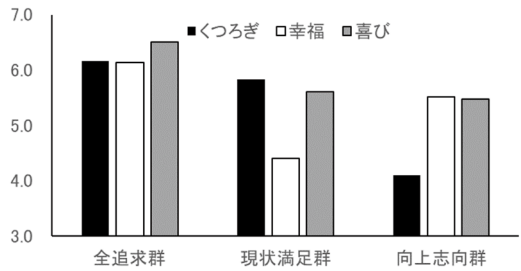


Figure 2 クラスタごとのHEMA尺度得点(南,2018)

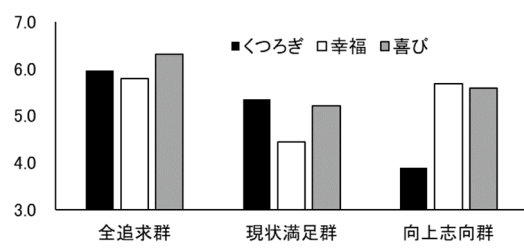


Figure 6 クラスタごとのHEMA尺度得点
(全データ結合)

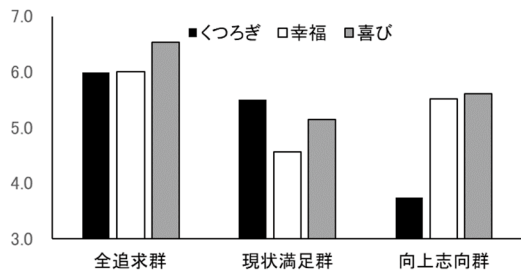


Figure 3 クラスタごとのHEMA尺度得点(南,2019a)

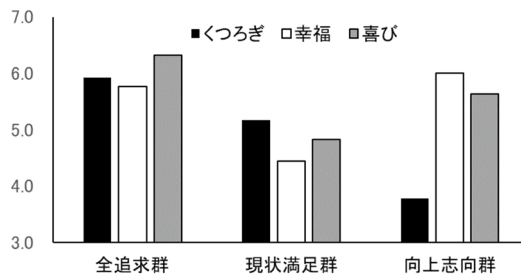


Figure 4 クラスタごとのHEMA尺度得点
(南,2019b: 研究2)

Table 1 クラスタごとの人数

	全追求群	現状満足群	向上志向群	計
南(2015)	68	58	24	150
南(2018)	63	79	91	233
南(2019)	39	35	46	120
南(2019b)	36	17	26	79
南(2020)	37	9	18	64
全データ結合	243	198	205	646

なることを見出している。

また、南(2019)では、教養教育の心理学概論の授業を受講した学生を対象に、社会的クリティカルシンキング志向性尺度の下位因子のうち対人的柔軟性因子と論理の重視因子、脱軽信因子において現状満足群より向上志向群のほうが高くなることを見いだしている。南(2020)では、同じく教養教育の心理学概論の授業を受講した学生を対象に、論理的クリティカルシンキング志向性尺度の下位因子のうち探求心因子と証拠の重視因子、不偏性因子、決断力因子において現状満足群より向上志向群のほうが高くなることを見いだされている。このように、認知的負荷が必要なクリティカルシンキングをおこなお

うとする態度においても向上志向群がもっとも高い得点を示したことが見いだされた。この結果は、向上志向群がもつ忍耐力などの非認知的能力がクリティカルシンキングを身につけるうえで重要な要因となっていることを示唆している。

分類の方法

こうした、現状満足群と向上志向群を選び出すには、現時点では大量の調査協力者を募りクラスタ分析をおこない分類するしかない。大人数の調査の場合は、クラスタが比較的安定しているのもよいかもしいないが、より少人数の実験を実施する場合には不適當である。そこで、本研究では、クラスタ分析の結果を活かしながら、判別分析をおこない、判別の手順について記すことを目的とする。

まず判別分析を実施し、正準判別関数の正準相関を検討する(Table 2)。モデル1の正準相関は.7以上であるため問題はないが、モデル2の正準相関が.7に満たないものとなっている。ただし、Wilksのラムダを参照すると、いずれも有意確率は.000と有意であることが示されているため(Table 3)、モデル2についても分析を続けることとする。

Table 2 正準判別関数の固有値(SPSS 出力)

関数	固有値	分散の %	累積 %	正準相関
1	1.242 ^a	62.1	62.1	0.744
2	.759 ^a	37.9	100.0	0.657

Table 3 正準判別関数の Wilks のラムダ (SPSS 出力)

関数の検定	Wilks のラムダ	カイ 2 乗	自由度	有意確率
1 から 2 まで	0.254	880.844	6	0.000
2	0.569	362.399	2	0.000

次に、有馬・石村(1987)を参考に、判別関数によるクラスタの判定をおこなう。正準判別関数係数を用いて、判別得点を求める(Table 4)。この値とグループ重心の距離を求め、最も近いクラスタに含まれるものとして判定する(Table 5)。この判定の判別率的中率は79.6%であった。この精度は十分なも

のであると考えられる。

Table 4 正準判別関数係数(SPSS 出力)

	モデル 1	モデル 2
くつろぎ追求	1.293	-0.039
幸福追求	0.012	1.140
喜び追求	-0.044	0.464
(定数)	-6.463	-8.568

Table 5 グループ重心の関数

クラスタ	モデル 1	モデル 2
全追求群	1.048	0.736
現状満足群	0.298	-1.286
向上志向群	-1.595	0.361

引用文献

浅野良輔・五十嵐祐・塚本早織 (2014). 日本版HEMA尺度の作成と検討—幸せへの動機づけとは— 心理学研究, 85, 69-79.

有馬 哲・石村貞夫 (1987). 多変量解析のはなし 東京図書

Duckworth, A. (2016). Grit: The Power of Passion and Perseverance. Ink Well Management, LLC, New York. (神崎朗子 (訳) (2016). やり抜く力—人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける— ダイヤモンド社)

古市憲寿 (2011). 絶望の国の幸福な若者たち 講談社

古市憲寿 (2013). 日本の「若者」はこれから幸せか アステイオン, 79, 88-102.

Heckman, J. J. (2013). Giving Kids a Fair Chance. MIT Press. (古草秀子 (訳) (2015). 幼児教育の経済学 東洋経済新報社)

Hitokoto, H. & Uchida, Y. (2015). Interdependent Happiness: Theoretical Importance and Measurement Validity. Journal of Happiness Studies, 16, 211-239.

平尾元彦・重松政徳 (2006). 大学生の地元志向と就職意識 大学教育, 3, 161-8.

豊泉周治 (2010). 若者のための社会学—希

- 望の足場をかける 星雲社
- 久世敏雄・和田 実・鄭 暁斉・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・内山伊知郎・平石賢二・大野久 1988 現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋大学教育学部紀要：教育心理学科, 35, 21-28.
- 南 学 (2015). 現代の若者の価値観と主観的幸福感の検討 三重大学教育学部研究紀要, 66, 171-178.
- 南 学 (2018). 現代の若者の価値観と友人関係 三重大学教育学部研究紀要, 69, 221-227.
- 南 学 (2019a). 現代の若者の価値観と主観的幸福感の検討(2)—生活満足度と協調的幸福感を用いて— 三重大学教養教育院研究紀要, 4, 53-59.
- 南 学 (2019b). 社会的クリティカルシンキング志向性を高める個人差要因—日常生活における動機づけ尺度による分類— 三重大学教育学部研究紀要, 70, 321-326.
- 南 学 (2020). 論理的クリティカルシンキング志向性を高める個人差要因—日常生活における動機づけ尺度による分類— 三重大学教養教育院研究紀要, 4, 25-33.
- 齊藤茉莉絵, & 藤井恭子 (2009). 「内面的関係」と「表面的関係」の2側面による現代青年の友人関係の類型の特徴—賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および充実感からの検討— 愛知教育大学研究報告, 58 (教育科学編), 133-139.
- OECD (2015). *Fostering social and emotional skills through families, schools and communities: Summary of international evidence and implication for Japan's educational practices and research*. OECD Education Working Papers, No.121, Paris: OECD Publishing. (池迫浩子・宮本晃司 (ベネッセ教育研究所訳) (2015). 「家庭, 学校, 地域社会における社会情動的スキルの育成—国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆」 OECDワーキングペーパー, ベネッセ教育総合研究所)
- 曾我部佳奈・本村めぐみ (2010). 青年期における大学生の主観的幸福感—その影響要因の探索に向けて— 和歌山大学教育学部紀要：教育科学, 60, 81-87.
- 白井利明 (1993). 時間的信念尺度の検討に関する研究 大阪教育大学紀要 教育科学, 42(1), 51-57.
- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文 (2012). 人間関係のスタイルと幸福感—つきあいの数と質からの検討— 実験社会心理学研究, 52, 63-75.